

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270101803		
法人名	株式会社長建工務店		
事業所名	グループホーム 桜坂・長崎		
所在地	長崎市本河内2丁目14番地-2		
自己評価作成日	平成26年1月26日	評価結果市町村受理日	平成26年4月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	-----------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構		
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号 HACビル内		
訪問調査日	平成26年3月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

長崎で平成12年に民間法人としては最初のGH開設して14年目に入りましたが、開設した時の思いが、まだまだ満足できない様に思いました。マンネリ化した現状を打破する必要を感じ、ホームを開設した時の思い、心に戻る事を目標としました。「入居者へ命を守る事の重要さスタッフが入居者の命を本当に守る思いで行動しているのか?も、点検しました。再度胸に手を当てて考え、理念に掲げる主であること。最期まで介護する。当ホームの特徴である、身寄りのない方への、最期でグループホームの法的な役目が終了するのではなく、最期のあと、葬儀から納骨までも、当ホームの理念の中の「グループホームは代理家族である」と言われる通り。家族の代理の事をする事にしました。入居者が望むことがあれば「終焉の家」「終いの住い」となる事にしたいとして、**グループホーム桜坂・長崎・終焉の家**と、我々の中だけで名称を仮に追加しました。スタッフに、入居者はここが終焉の家であるので、今までよりさらに、入居者にとって温もりのあるホームにして貰いたいと再確認したかったからです。昨年長崎で起きたグループホーム火災で火災訓練がなされていなかった事の原因も云われている為、さらに命を守る事を考えて、入居者が万が一異常状態の際に、救急車要請の訓練と、送信の際の病院への対応、フェイスシートを作成し、スタッフの誰が救急車に同行しても、分る様な資料を用意したりし、訓練を取り入れる事にしました。すべて入居者の命を24時間守る為です。また週の2日は入居者とスタッフ共同で手作りパンケーキと手作り餃子を作る事にし、継続をしています。食事時間も手作り談義に花が咲き過ぎています。。また入居者の誕生会も以前はまとめてしていた事を入居者の誕生日の日に「確実に」行ない「次の年には出来ないかも知れない、今年が最後かも」と云う意味をスタッフに指導して尊厳と誠意を込めた誕生会を開催しています。

事業所は代表者の自宅を改装した建物で住宅地の中に位置している。グループホームの原点ともいえる一般の住宅で利用者は生活し、まさに利用者の自宅として利用者が自由にいきいきと生活している様子がうかがえる。そのため、食事の準備など家事全般においても利用者ができることはできるだけ行ってもらい、職員は見守りを中心とした支援に徹している。事業所の理念にもあるように、利用者と家族同様に接し終の棲家となるよう仏壇まで購入し最期までの支援に職員全員が取り組んでいる。これまでも、身寄りのない利用者の葬儀はもちろん納骨まで支援している。また、地域との関係においても行政との協力関係の下、独居の高齢者の見守りや買い物同行など事業所だけでなく地域全体の高齢者や身寄りのない高齢者支援に積極的に取り組んでいる。代表者の高齢者などの弱者に対し、安心して住める社会づくりを目指すという気持ちが全ての支援に繋がっており、地域福祉への理解と貢献は計り知れない。このような事業所は特異な存在ではあるが、地域社会にとっては無くてはならない存在となっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念での最期までの記載を介護者へ浸透ができてい るようになって来た。終焉に近い症状の方への、スタッフ の思いやりと、細かな報告や連絡を綿密におこなう事 で、明らかに、入居者への介護がより細かく、確実に 出来るようになって来た。終焉と思われる方が、その思い と、努力で、長い生命になられている。	高齢者や障害のある人が安心して住める社会づく りをめざすことを理念に掲げ、利用者の終の棲家 として最期まで支援していく事を心がけており、職 員にも浸透している。また、地域の高齢者への支 援も行うなど地域に密着した支援を実施してい る。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられる よう、事業所自体が地域の一人として日常的に交 流している	代表者の親が長崎県議会議員であったために、地元と の地域的な付き合いは、ある。代表者の妻である江口 房子施設長は今年までホームでの仕事を勤めながら、 代表者の理解の元で地域に貢献するためと、自治 会会長の願いがあり、民生委員を3年間勤めていた。 そこで地域とのつながりをさらに深めて行った事と思 われる。代表者も自治会とのつながりは深く、監査委員 やお宮日の、みこし守の役員となり、長崎に滞在の際 は地域との交流をもっている。自治会役員へと、毎年 再度再度願われている	代表者が地元出身であり自治会活動に参加して いる。また、施設長が地元の民生委員を務めている こともあり、地域の独居高齢者宅を巡回し見守 りを行っている。地域の人には事業所の行事に参 加してもらうほか、小学校の文化祭に職員がボラ ンティアとして参加するなどの交流を行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の 人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて 活かしている	地域のホームとして、町内では、地域推進委員会で自 治会の役員が出席され、また民生委員も、参加され。 認知症の地域への理解度を深めている。。いろいろな 地元での行事参加と寄付行為により、地域の方へ介護 施設の事業所として、また認知症のみでなく、高齢者 への対応や身体障害者の対応についても相談が、頻 繁に持ち込まれる。今後も地域の方々が気軽に立ち寄 れる雰囲気作りに心掛けている。クリスマスの時期に は、イルミネーションを点灯させ、地域のその時期の名 物視となっている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、 評価への取り組み状況等について報告や話し合 いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かし ている	約2ヶ月に一回の定期的な運営推進会議を実施し、市 役所役職員、包括支援センター職員、町内会役員、博 識者、利用者、法人代表者及び管理者、ケアマネやス タッフで構成し、報告など詳しく写真を使い説明してい る。参加者委員の意見をサービス向上に活かしてい る。長崎市民の行方不明などへの、協力も行ってい る。	運営推進会議は、2ヶ月に1回規程のメンバーによ り実施している。毎月、入居者の状況や行事報 告、意見交換などが行われている。メンバーの提 案で地域の老人会と自治会主催の災害訓練に参 加したり、地域の階段にわかりやすくするための 白線を引くなど会議での意見をサービス向上に活 かしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村担当者と、何かあれば、最大の協力を行う事を常に伝えている為、日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。また生活保護課が、近年身寄りが無い市民が、認知症になって、どこにも行き場が無い。との事で、当ホームに緊急引き取りをして、保護した経過もあり、何かあれば、桜坂・長崎という。協力体制になっている。2ヶ月に一回の定期的な運営推進会議に市担当者及び包括支援センター職員の方が参加され、また何か必要な時は頻繁に連携を充分にとりサービスの質の向上に努めている。市の包括支援職員や市介護保険グループ職員とも、積極的に協力体制を築いているつもりである。	行政担当者とは互いに携帯電話でやりとりするほど交流がある。身寄りのない利用者の後見人について相談したり、行政から身寄りのない高齢者の受入れを依頼されている。互いが連絡を密に取り、協力関係を築くよう取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関などの施錠は禁止し、自由に気軽に立ち寄れることが出来るよう努めていたが、名古屋の認知症の老人が列車の事故で720万円の賠償を裁判で命じられるという判決を新聞で知り、考え方を変えた。「施錠しないホーム」を我々は理念としている事が、仮に万が一ホームからすぐの道路に出る事故があった場合は、大事故になる事。それがすべて管理する者へ、賠償が来る事をスタッフには伝えていて、理解させ、過去も入居者が無断でホームから出てしまい、警察に保護された件があり仕方なく内部での施錠を行う事にした。それが身体拘束であれば今回の裁判では矛盾が生じる。	身体拘束については、内部研修を実施しており職員は対象となる具体的な行為を正しく理解している。命に関わる場合の拘束を実施する場合は家族に説明し、経過記録を取るなどできるだけ拘束しない支援を実施している。これまで玄関の施錠を禁止していたが、事故が発生した場合に事業所に賠償責任が及ぶ可能性があることから家族に同意を得て玄関の施錠をすることとなった。	事業所の玄関は道路に面しており事故にあう可能性もあり、また、事故になった場合の責任が事業所に及ぶ可能性も無いとは言えない。ただし、利用者の行動を制限している事は事実であるため、段階的に施錠する時間を短くするなどの取り組みに期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	官庁主催の講習会に参加し、基本的考えを再度学ぶ。いかなる虐待を見過ごさないよう、スタッフなどにも徹底した虐待防止の管理する。介助の身体に虐待形跡が無いかのチェックを常に行なっている。高齢者への虐待など「絶対」に見過ごしはしないという姿勢がホームの精神である。理念として		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持つべきだが、制度の理解まではまだ時間がかかっている。管理者は入居者が日常生活自立支援事業や成年後見制度について利用している為に理解しているので、ホームの職員にも学ぶ機会を持たせたいと思っている。利用者に必要な状態がきたら関係者と話し合いをしている。当然、それらを活用できるよう支援している。今日もまだ満足のいく事は、無い為。反省課題である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不満が出ない事を、常に心掛けているが、特に利用料の改定時などは、事前に手紙などを郵送し家族等に説明している。不安や疑問点があれば、いつでも十分な説明を時間を掛けて行なう事も、家族等に説明している。そのために入居者家族からの不満は聞かれなくなった。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営に関する利用者、家族等意見が、近年は無い。家族からの意見や要望が出た時点では、毎日のミーティングでも報告を全スタッフの前で実行する事になっている。今後も利用者の状態変化時の連絡や健康面での相談を話し合い、掛かり付けの医師の意見や家族の意見なども運営に反映している。当ホームは入居期間が長く、家族とも何でも意見が言える間柄となっている。	家族からの意見は、訪問時に聞くように努めている。利用者の提案で、入浴の順番を変えたり、家族から野菜を食べさせてほしいとの提案を受け、手作りの野菜ジュースを提供している。また、美容室を営む家族に利用者の散髪をお願いするなど利用者や家族の意見を運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフへは、いろんな知識を高める事を、管理者が指導している。介護における質問なども、意見も聞き、説明や逆に問いかけも行い、医療関係等の使用方法等は理解度がスタッフがレベルアップしていると思われる。今後もしろんな介護用語の説明、提案があれば取り入れる事になっている。ただ近年はスタッフも、介護における勉強意識が以前より薄らいでいると思う。	代表者は会議や食事の配膳時などに職員の話も聞いている。職員の要望で、レクリエーションに使う道具を購入したり、炊飯器をガス釜に交換している。また、代表者は業務以外の職員の相談にも乗るなど意見や要望を受け入れる環境が整っており、職員からの意見を運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者として、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努める事によって、ホームのレベルアップに努める様に努力をする事になっている。介護報酬が相変わらず低いためにも低賃金であるが、いろんな努力で、給料を見直し、全員の昇給を行った。また、猛暑手当なども3月間は特別手当として支給し、スタッフへの感謝の証しを示している。しかし、きれい事ばかりでなく、すべて近年は給料が低いとの不満がある様に感じる。給料が高くなれば、いろんな不満も解消されると思われる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ホーム内でケアにおける、その者の能力と力量に応じた実務での優しい言葉での指導が必要と改めました。諦める事なく、資料文書を参考にすると口頭での伝達指導が重要である事を実践する社内指導をミーティング等で書き入れている。スタッフを育てる意味でも、死に行く人の家をこのホームでいかにして、医療関係者と協力して介護して行くのかなども機会を設けて肌で感じてを心掛けています。ホームには介護における参考書を買ひ、医療に関する知識なども学ぶ機会を与えています。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者と交流する機会を作りが不足していると感じている。近年は講習会等の機会と同業者と情報交換をしているのが現状である。現在は医療機関などと情報交換しケアサービスの質の向上に取り組んでいる。グループホーム全国協議会に加入して、今おかれて居るグループホームの実態を定期便書類で取り、スタッフにも見せています。市役所からも市内の介護従事者を対象に、講習会を企画されているので、同業者同士での交流機会を持ち、ホーム同士の情報を交換している。が、以前みたいにはホーム同士の交流は少なくなっている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	管理者やスタッフが、入居者本人との日頃の介護等で信頼を得て、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。利用者の話をゆっくり聴き、そばに付き添い入居者との信頼関係が築くよう努力している。年間の行事や誕生会でいろんな自分の意志をはっきりと示す様子を理解し、意思に応ずることにしている。ホーム生活も長く高齢になって来た事で、困ったりした事は出さない。その前に、普段の生活の中で、自由な言動で、要望などを聴いているので、それに答えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	平成12年に開設して平成26年4月で、約14年経過するが、代表者の考え方としての指導は、サービスを導入する段階で、最初に「家族がどんなことで困っているのか？」を聞く事において、まだ不満足を感じる様に思っているため、今後も出来る限り初心に戻る様に勤める事になっている。また「利用料など金銭面など」に関しても、出来る限り要望に答えるよう支援している。当ホームは、家族のいない、無縁の方が入居されているが、家族と同じ思いで、また人としての最期を安心して迎えられる事への、事業所として出来る限りの努力を行っている。入居者によっては、身元引き受け人も無い入居者もあり、終焉の際のその後の事も世話する事が多いので、入居者の要望も細かく聞いておく事になっている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	何が一番必要としているのか見極め、安心した生活を送れるように、介護していて観察し「出来る事。出来ない事」を見定めして、支援している。が、他のサービス利用も含めた対応に努める事も、必要であるが現在無いのが現状である		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ホームの「理念」にあげている通りであり、利用者の尊厳を尊重しながら支えあう、信頼できる家族同様の関係を築いている。介護されるだけでなく、暮らしを共にする者同士の関係、それがグループホーム本質である。だが、それも我々の自己満足かも知れないと、自問自答しながら、スタッフの自己判断をすること無くうめばれる事なく、を今後の我々の課題と思っている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	開設して以来、常に「家族の関係を常に基本」として、スタッフへも考えを細かく、伝えて来ている。身元の引き受け人のいる家族の居る者、家族がいても見放されて居る者、無縁の者など、家族の支援はいろんな例があるが、共に支えて行き事については事業所として出来る限りの努力を行うことと、している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。事へ、つながりの扉を閉じる事なく、支援して行く事を、当然努力している。	利用者家族の墓参りや利用者が以前働いていた店に同行するなど支援している。また、利用者の友人が事業所に来訪した場合は、お茶を入れ歓談できる場を提供したり、事業所の行事に参加をお願いするなど馴染みの人や場所との関係継続のため支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホーム内で、入居者同士が、会話や見守りなど、安心して笑顔に、胸を打たれる事もある。一人一人が孤独を味う事が無いホームが、理想であり、スタッフの入居者への思いやりが、入居者にも伝わっている様な気がした。無言であってもお互いの立場を分かり合っている者同士と思われる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後は、当ホームとは関係なく、途切れる事が今までの事実であり。現実には行ってない。しかし町で逢うことがあるが、その時は声掛けをしているが、その方の行き先の施設の考えもあり、それ以上には突っ込んだ話しは話さない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや意向を把握し、外出や趣味への支援などを本人本位に検討する様に努めているが、理想と現実には難しい事が多い。室内への持ち込み家具等で希望を把握している事もある。あまり不満も言わない。	入居当初からフェイスシートに趣味や特技、特徴などを記録し職員はできるだけ把握するように努めている。困難な場合は、表情や仕草で察知するなど職員が利用者本人の身になって考えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	介護計画書等で、フェースシートで分かる範囲で入居者の一人一人のバックグラウンドを調べ、これまでの経過を把握する事になっている。また日頃の会話で経過バックグラウンドを知りその人らしく暮らせるよう出来る限り努力して支援しているつもりである。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの一日の過ごし方の把握は、個人日誌などで行っている。毎日の様子を元に心身状態、有する力等の現状の把握に努力し努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	管理者兼施設長が入居者本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、総括施設長やスタッフなどの意見を取り入れている。本人、家族、必要な関係者と話し合いについては、家族の意向は聞く事になっている。	フェイスシートやアセスメント、利用者や家族の希望、職員の意見などを踏まえ、計画作成担当者が日々の支援については、支援日誌に目標に沿った支援が行われていることが記録されているが、看取りを実施した利用者のみモニタリングが作成されているため、全ての利用者のモニタリングについて作成することが確認できる。ただし、一部の利用者のモニタリングが未作成となっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別に個人日誌などで記録し、スタッフ一人ひとりの入居者への気づきなどを、記入している。介護計画書の見直しに役にたっている。		

グループホーム 桜坂・長崎

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	難しいといえる。一人ひとりを支えるための事業所の多機能化については、当ホームは取り組みがまだしていないため、今後の課題となる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりの暮らしを支え、日々の楽しい生活を送れるよう支援しているが、地域資源を把握してはいるが、当グループホームとして、認知症の入居者へどのような支援が出来るのか？を検討課題としている。安全で豊かな暮らしの楽しみが、どのような事かも当ホームでは、課題である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当ホームの、唯一と自慢出来るのは、掛かりつけ医師の白髭医師と影浦医師という、地域の2名の存在である。ホームへの定期検診がなされている。また皮膚科や諏訪の杜医院精神科の医師も、ホームに定期的に往診され、入居者の対応が常に行き届いている。本人や家族の状況に応じ、医師への受診へ同行なども継続しながら、またその他にも適切な医療を受けられるよう2人の掛かりつけ医師の支援を受け、毎週柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組む様に努力している。定期的に診療に来訪されている為、適切な医療を受けられるように支援している。健康状態や急変時など24時間かかりつけ医師に報告し、協力病院に依頼など、適切な医療を受けられるように、万全な体制で安心した入居者への支援を行なっている。	基本的にはかかりつけ医の受診が可能であるが、現在は協力医を受診している利用者が多い。協力医とは月2回の往診や管理者とのメールのやりとりなど24時間連絡が取れる体制である。精神科医の往診や歯科医の検診もある。身寄りのない利用者が多い為、付き添いは職員が行い適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療加算の手続きはしていない。かかりつけの医師がその代わりにされている。		

グループホーム 桜坂・長崎

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、直接看護師や医師と病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。かかりつけ医師の紹介で入院が出来、紋段無く病院へ搬送して入院となっている。またその他の病院へも、入居者の受診している関係で、問題なく病院への入院が出来、心強い。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行う事を、行う様にしている。看取りに関して契約書に明記し、家族に同意書もいただき、職員にもホームの方針を説明している。また、身寄りが無い入居者に関しては、事業所として、ホーム開設以来の考え方としては、「人としての最期を誠意を持って行うことを、当ホームでの基本としている。無縁の方が年間に数名、死去されているが、考え方通りに、すべての事、葬儀及び納骨までの期間の安置を総括施設長がスタッフに指示し、行っている。理念での書き入れどおり、長年の歴史でもホーム入居者がグループホームとは最期までの介護が当然であるべきであるとしている。	利用開始時に本人・家族に看取りに関する説明を行い同意を得ている。利用者にとって自分達は代理家族であるという事業所の考え方から、身寄りのない利用者は看取りから葬儀・納骨まで行う事もある。協力医の指導を仰ぎながら終末期の支援に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応法を定期的に訓練し、初期対応がスムーズに行えるよう常に訓練しているが、それでもまだまだ完璧でなく、教育している途中であるし、不足であると思われる。		

グループホーム 桜坂・長崎

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	当ホームは、基準の延床面積以内の為、スプリンクラーの設置がされてなかったが、設置する事に強制的となり、今年3月に設備を完了とする事にしてるが、火災だけが災害では無いとの為に、入居者の災害の避難訓練においては神経質になっている、毎週一回は火災設備を利用した「避難訓練」を行なっている。スタッフが疲れる事もあるが、入居者の命を守る為には必要な事であり、説得をしている。施設長1名の甲種防火管理者講習を受け、地域の火災・避難訓練や地域の災害訓練に参加し日頃より実技を行っている。また江口総括施設長は現役の消防団員である。夜間はスタッフ一人体制であり避難が困難と想定して、近隣の江口家にも協力を願っている。江口房子施設長は隣りに住んでいる為に、すぐにも駆けつけられる態勢にして、24時間携帯電話を肌身離さずに置き、爆眠している事も想定し、別に緊急ボタンを枕元に置き、夜間でも、便所に行かない限り約2分で駆けつける事になっている。	週に1回利用者も一緒に抜き打ちで避難訓練を行っている。消防署の立会いや実際に夜間帯に訓練を繰り返す事で、職員はもちろん利用者もスムーズに避難できる体制が出来ている。自治会参加や管理者が民生委員を務めていた事もあり、地域との関係は密であるが、近隣住民の高齢化もあり地域の人の訓練参加には至っていない。	事業所が住宅密集地域にある為、火災はもとより風水害時においても地域との連携が不可欠である。運営推進会議などで案内を行い、実際に地域住民が訓練に参加される事を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念に基き、スタッフへ新人研修で一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけに配慮した言葉かけを行う事を教育している。	利用者には敬語で話しかけ、1人1人のバックグラウンドを把握し呼び方も注意している。職員には年1回の筆記試験の問題に、プライバシーについても項目に入れるなど代表者が指導し、人格を尊重した言葉掛けを行うよう努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ、利用者の希望や思いを把握して一人ひとりのペースを大切にしているし、自己決定できるように働きかけている。が、長年ホームに入居している人が多く、自由な為、結構自己主張が多すぎる。事もある。が「自由に言える」については、それもありがたい事であるかも知れないと思っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の決まりや都合を優先せず、利用者の希望に出来る限りそって支援している。が、身体を動かない事があるため、毎日時間を決めてスタッフと触れ合い活動で変化のある日常の暮らしとしている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者一人ひとりの個性に合わせて、その人らしくおしゃれが出来るよう取り組んでいる。散髪にも希望者は行ける様に、している。衣服も個人の意志を尊重して自由にしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事が楽しみなものになるよう好みなどを取り入れ、栄養バランスにも気を使っている。が入居者の希望より、スタッフの食べたい希望を取り入れる為、一週間に2日は利用者と職員と一緒に手作りギョウザやハンバーグ等、食事作りをしている。	食事は職員だけで作るのではなく、時間がかかっても利用者にも手伝ってもらっている。献立を工夫し、食材の切り込みや手で混ぜるなどの下ごしらえと一緒にしている。おやつも利用者の意見を取り入れ、手作りに変えたり、ジュースで野菜ジュースを作るなど利用者と職員と一緒に楽しみになるよう支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量や栄養バランス、水分量、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をし、個人に応じた食事量と1日の水分量などを日々の記録に明記している。一年中、生野菜だけは摂取が基本としている。料理は技量もあるが味においては努力の要素がある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	基本的小児のご誤の恐れもあるために、夜食後に口腔ケアは行う。また本人の力に応じた口腔内の清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定期的時間的にでなく、一人ひとりの排泄パターンを把握し、支援する事により、一人一人の失禁を出来る限り少なくなるよう支援している。	昼間はできるだけトイレ誘導を行い、夜間はポータブルトイレやおむつを使用している利用者もいる。排泄パターンは時間毎の排尿・排便チェック表で把握している。職員に向けて排泄自立の大切さの教育を行っており、昼間はパッドの大きさを工夫するなど自立に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的にホーム内でのレクリエーションで、無理のない体操などの運動を行い、便秘予防に努めている。毎日便の状態を詳しく(色、堅い柔らかい?回数)排尿も色、回数の確認をしている。便秘の理由も原因等をスタッフのミーティングで報告などをして、一人一人の様子を把握することに、指示をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は月水金の週3回としているが、冬季は週2回としている、状況に応じて、入浴日にこだわる事なく、入浴は可能としている。入浴出来ない者へは「足湯」を行っているが、足湯の設置をする事になってから数年たつが、足湯が入居者の楽しみになっている。入浴は一人ひとりの希望に沿った湯温度に設定している。	入浴日は月水金で利用者希望の順番に行っている。入浴拒否の利用者の為に足浴機を導入し、睡眠が深く取れるようになったなどの効果が出ている。職員も介助しながら一緒に入浴したり、仲の良い利用者同士で入浴したりと個々に沿った支援に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な生活が出来る事が当ホームの特徴であるため、休憩したり安心して休まれるよう一人ひとりにあった生活環境を最善の提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の一人一人がどんな薬を飲んでいるのかは、常に説明をして理解させている。毎食後内服薬の確認をし記録をしている。また薬の、副作用などの変化に注意し用法などの理解をしている。ミーティングで説明等をしている。また間違った服薬がスタッフに無い様に、入居者の薬を一人一人分かりやすくしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の会話の中から趣味や生活歴を、なにげなく聞き出し、その過去を思いだしたりした、生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、の会話等で、楽しみごとにつながるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩などを行い季節の行事を企画し、花見などを行事の中に取り入れ外出の機会を多くしている。入居者も高齢になりあまり外出を誘って外出を喜ばれないが、入居者と共に出掛ける等は行なっている。春になれば近隣の散歩などもしている事を、自立する意味で、支援している。入居者が家族と外出する要請にも、すべて支援している。	日常的に系列の事業所に遊びに行ったり、食材の買い出しや近所の公園を散歩している。リフト車があるため車椅子の利用者も含め、花見など全体での外出行事を定期的に行っている。食事中に外出したいところをさりげなく尋ね、希望の場所に出掛けられるよう支援している。	

グループホーム 桜坂・長崎

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者がお金を持つことはしていないが、欲しい物があれば、スタッフが買って来る様にしている。ホームで立て替える方式にしている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話など自由に利用している。が、掛ける事は無い。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングから、ガラス窓であり、四季折々の流れが感じられる様になっている。例えば前方の山が山々の桜や紅葉が見られる部屋に隣、季節感め込み絵の様になっており、利用者にとって極楽の場所である、また共有空間では室内に犬と野良猫が住み着き仕方なく飼っているが、入居者の癒しに繋がっている。	利用者は日中、台所の食卓椅子やリビングのソファに座って、全員が仲睦まじく会話し家族のような生活を送っている。室内でペットを飼っており、利用者も世話をするなど家庭的な雰囲気である。リビングは季節を感じる事ができる飾り付けをするなど工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	民家を改築して家庭的な雰囲気の中で生活していただけるよう支援している。気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。入居者同士のトラブルも無い。女スタッフ同士のトラブルも玉にはあるが、それも楽しい笑いの話題になっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談しながら、使い慣れた家具などを持ち込んでもらい、居心地よく過ごしてもらえるよう工夫している。	家具などの持ち込み制限はなく、利用者の馴染みの物を持ち込んでいる。民家を改築した建物である為、居室の間取りも違い、それぞれが個性的な居室となっている。職員が毎日居室の清掃を行い、居心地よく過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全性を考えながら、出来る限り役割がある。犬の世話も、普段は「言葉も発すことが無い人」が、自分の勤めであるかのごとく、犬の糞や餌をやる事を毎日の仕事とされている。入居者にとって「分かりやすい事をも目的とした表示」を付けたりして、一人ひとりに合った生活環境を整えている。		